

# 京都市・乙訓地域公立高等学校教育制度に係る懇談会（第3回）の開催概要

1 日 時 平成24年2月16日（木） 午前10時～正午

2 場 所 ルビノ京都堀川 ひえいの間

## 3 出席者

- (1) 委員14名（欠席1名）
- (2) 府教育委員会 永野指導部長、古市指導部理事、藤井高校教育課長 ほか
- (3) 市教育委員会 清水指導部担当部長、三宅高校教育担当課長 ほか

## 4 概 要

### (1) 前回内容の確認

### (2) 配布資料の説明

### (3) 「意識調査」の集計概要の報告

◇調査対象・回答者数等：資料1 ページのとおり

◇結果概要

- 設問1 [希望する公立高校の有無：中学生のみ]
  - ・「公立高校ならどこでもよい」という回答も含め、約8割の生徒が公立高校への進学を希望している。
- 設問2 [進学先を決定する動機]
  - ・中学生・高校生とも、「校風」・「通学時間」・「部活動」がベスト3で約5割を占めており、入学後の高校生活にウェイトをおいていると見受けられる。
  - ・それに対して、保護者は「校風」・「通学時間」・「進路実績」がベスト3で約6割を占めており、生徒よりも高校卒業後を意識している傾向が強いと思われる。
- 設問3 [高校進学にあたり将来の目標や目的を考える(た)か：生徒のみ]
  - ・「どちらかといえば」も含め「考えている」が中学生で約6割、高校生で約5割だが、「考えていなかった」と答えた高校生も2割を超えている。
- 設問4 [入試制度の難易度：高校生及びその保護者のみ]
  - ・「どちらかといえば」も含め「わかりやすかった」が高校生で約5割、保護者では約3割であり、現行の制度は「わかりにくい」と思われている傾向にある。
- 設問5 [志願先の高校を主体的に選択することの是非]
  - ・生徒・保護者とも、自由に選べることは「よいことだと思う」という回答が圧倒的に多い。
  - ・ただし、前提を「高校の特色や自分のやりたいことなどに応じて」としていることを鑑みれば、生徒のニーズに応じて魅力ある教育活動を展開していくことがより大切になってきていると考える。
- 設問6 [地理的条件による入学校の決定方法：高校生及びその保護者のみ]
  - ・生徒・保護者とも、「よいことだと思う」という意見は、1割に満たない状況であり、「どちらかといえばよいことだと思う」という意見を含めても、約2割と、どちらかといえばあまり支持を得ていない傾向にある。
- 設問7 [多様な入試方法]
  - ・高校生については、7割を超える生徒が「よいことだと思う」「どちらかといえばよいことだと思う」と回答しているが、保護者については、生徒よりも支持する意見が少ない。学力や学習意欲の低下を懸念する保護者の意識が反映しているのではないかと考える。

○設問8「受検機会の複数化」

- ・全体として8割を超えて支持されているが、高校生の保護者については他の層から比べると支持をしないという回答が若干多かった。

○設問9「現在の入試制度の認知度：中学生及びその保護者」

- ・「よく知っている」「ある程度知っている」と回答した中学1年生は約2割、2年生は約3割、保護者は約5割であった。

#### (4) 協議

##### ア 意識調査の結果について

###### (7) 結果全般

- ・意識調査の結果からも、中学校の進路指導の在り方が問われていると考える。そのためには、特色選抜や推薦入学で入学した生徒が、どのような高校生活を送っているのかといった情報交換を高校と中学校の間で密にし、さらにそれを中学校の進路指導に生かしていくことが大切である。また、高校が、入学者選抜の制度やしきみだけでなく、入学後の生徒の状況を中学生や中学校に伝えることで、魅力ある高校生活を送れる学校として生徒から選ばれることにつなげていくようにしなければならない。
- ・子どもたちの意識は、中学校1年生段階と2年生段階では全く変わってくるのではないかと。中学校3年生の4月段階で意識調査を行っても、結果は変わってくると思う。子どもたちや保護者は、将来にもものすごく不安を感じながら、今後自分の進路を決めていかなければいけない。そうした中で、子どもたちは、まずは高校で過ごすということを念頭に置いているのではないかと考えている。

###### (イ) 設問2について【高校進学の際に重視するもの】

- ・進学する高校を考える際に、生徒の多くが「部活動」を重視していることや「制服」を選んでいる生徒が多いことは注視すべきかと考える。
- ・意識調査では、「校風」や「進路状況」、「通学の時間」で学校を選ぶといった点が強く反映されているが、最近では、公立高校においても〇〇高校にしか行かないなど、高校を選ぶ子どもたちが増えてきていると感じている。
- ・京都市が実施する「中学生とのふれあいトーク」において、中学1年生や2年生に、「将来の夢は何か。」と聞くと、「まだ考えていません。」との回答が多かった。また、「どの高校に行きたいか。」と聞くと、「そんなこと考える暇や余裕がない。」という意見が大半であった。ただ、部活動をしている生徒からは、部活動に対する熱意や、高校でもその部で頑張りたいという目的意識などが感じられた。また、職業体験を経験した生徒は、職業などを意識し、高校を選択する視点を持つのではないかと感じている。
- ・進学先の高校が決まっている中学3年生の保護者に、「どうやって学校を決めたのか。」と聞いたことがあるが、学校のイメージ(名前)という意見が多かった。
- ・高校進学にあたっては、中学校の進路指導のもとで相談しながら志望校を決めるが、子どもたちは「雰囲気」のようなもので学校を選んでいるように思う。ただ、その「雰囲気」にしても、正確に把握しているのではなく、「〇〇高校の方が進学には有利」というような保護者間での風評によるものや塾などの指導による

ものもあり、実際にその内容が正しいかどうかは確かめようがない。

実際に高校に入学してみないとその学校が子どもに合っているかどうかはわからない。入学前の各学校の評価はあまりあてにできないにも関わらず、友人間の噂や一般的な評価でしか判断できないのは大変残念である。

- ・ 以前、自校において、卒業を控えた生徒を対象に、「あなたはいつごろ進路先を決定しましたか」「あなたが志望校を決める基準となったものは何ですか」というアンケートを実施したことがある。  
府の私立高校あんしん修学支援事業のない頃だったこともあり、志望校を決める1番目の理由は、費用・学費であった。  
2番目に回答が多かったのは、通学距離、次が雰囲気であった。私は常々生徒にその高校の雰囲気を大切にするように言っている。パンフレットなどで見るよりも、高校に足を運んで感じる雰囲気や先輩、高校の先生と話をしたときの雰囲気、自分はこの学校なら頑張れそうだとか、この学校は合わないなどと感じることが大切だと伝えている。  
また、雰囲気と同程度の割合で、部活動や制服を選ぶ生徒が多かった。
- ・ 自校で実施されたアンケート調査結果も含め、意識調査の結果も学校の状況や地域性などによって若干異なってくると思う。地域によっては、費用や距離、高校の教育内容などではなく、そこに生まれる〇〇高校に行く、としか考えられないところもある。正しいか、正しくないかということではなく、ある一面を表しているものとして調査結果を捉えるべきである。
- ・ 「高校を選ぶ際に何を大切にしましたか」という問いに対して、総合選抜制度のもとではやむを得ない部分もあるが、高校としては、中学生等に説明する際に大切にしている「教育方針」や「学習内容」などがあまり評価されていないことは残念である。

#### (ウ) 設問4について【受検時の公立高校入試制度】

- ・ 「わかりにくかった」という答えが多かったことについて、中学校としては責任を感じる。  
進路指導主事等の経験年数によらずに選抜制度の説明ができるよう、共通の説明資料を使用する等、意識調査結果も踏まえ、さらに工夫して説明したいと思う。

#### (イ) 設問6について【総合選抜において地理的条件によって入学校が決定】

- ・ 総合選抜制度における、いわゆるバス停方式のもと、住居を転居してでも行きたい高校に進学したいと思っている生徒がいる。このことは、高校生の意識調査の結果にも表れている。こうした課題をどうしていくのかということは考えていかなければならない。

### イ 現行の選抜制度の課題等について

#### (ア) 総合選抜制度

- ・ 私立高校では、学費の免除や通学費の補助をしたりしている学校があり、公立高校としては(学費面での優位性がなくなったという点で)危機感を感じている。その分、私立高校に負けない魅力ある高校をつくっていかなければならないが、現行のバス停などで入学校が決定する総合選抜制度のもとでは、行きたい学校に行けないという理由で、「それなら私立高校へ行く。」という保護者等の声も聞い

ており、制度上の課題と感じている。

- ・ 保護者から、「どのバス停であればどの学校に入学できるのか。」という質問が多く寄せられる。また、願書に記入されているバス停に疑問を感じることもある。制度が正しく運用されていないということは大きな課題であり、現行制度の限界だと感じている。
- ・ 総合選抜制度のもと、合格して入学校が決定したにも関わらず、合格発表の時に希望していた学校に入学できなかったと涙を流す生徒を見てきた。  
第Ⅰ類だとどこの学校に入学するのかわからないので、第Ⅱ類や専門学科を志願して、ダメなら私立高校に進学するという生徒もいる。保護者としても、子どもが行きたい学校に行かせてやりたいと思うのは当然である。行きたい学校に行けないのが、本人の能力や学習成果によるのではなく、制度に起因しているとしたら、これは重大な問題であり、早急に改善すべきである。

#### (イ) 制度のわかりやすさ

- ・ 第1次判定による合格と第2次判定による合格など、総合選抜制度における合否判定のしかたがわかりにくい。
- ・ 私の子どもは普通科に第Ⅰ類・第Ⅱ類が設置されて間もない頃に高校を受検した。その際、中学校から選抜システムの説明をしてもらったと思うが、当時は、自分の子はどこの高校に行けるのかという思いしかなく、全体像についてはあまり関心がなかった。(制度説明を受けて)こんなに複雑だったかと改めて感じた。保護者の多くが理解していなかったと思う。  
入学者選抜制度は、保護者にとっても、生徒にとってもわかりやすいということが大切である。
- ・ 保護者にしてみれば、入試制度は「わからない」というのが率直な答えだと思う。意識調査の中で、今後の在り方について問う設問があったが、保護者は自分の子どもがどこの学校のどの学科を受けるのかという点にしか意識がなく、制度のしくみについてまで考えていないということが現実ではないか。

#### (ウ) 類・類型制度

- ・ 第Ⅱ類の定員が割れている上に、高校に入ってから第Ⅰ類から第Ⅱ類に類型を変更することができるとするならば、入学段階で第Ⅰ類・第Ⅱ類に分ける必要はないのではないかと感じる。

#### (イ) 中学生の進路選択意識

- ・ 現在の入試において、中学生はまず普通科とそれ以外の学科ということで、選択しているのではないか。  
今の制度では、(普通科と専門学科の選抜制度の違いによって、)普通科に行きたくないから職業系の専門学科に行くという選択が起こりうると思う。
- ・ これまでの選抜制度の変遷においては、公立高校は私立高校よりも優位な立場にあり、また、それだけの役割があったと思っている。  
まず第一に、質の保障という点で言えば、類・類型制度のもとで学力水準の一定の均一化が図られてきた。だから、保護者にしても生徒にしても、公立を選ぶ

か、私立高校を選ぶかという選択が基本であったと思う。

また同時に、学力面だけではなく、一定の自由度を持つ学校生活の保障も行われてきたが、一番大きな優位性は学費などの費用の面であった。

しかし、私立高校のあんしん修学支援事業など私立高校への就・修学支援制度が充実される中で、中学校卒業後の進路に大きな変化が生じてきた。京都市域に限ると（平成23年3月卒業生の）私立高校への進学者は30%を超えている。これは十数年ぶりのことだと思うが、前年度と比べて約200人程の増であった。

- ・ 生徒のほとんどが公立高校と私立高校を受検するが、最近では大学進学と同様、いろいろな高校を受けて、合格した中から好きな高校を選ぶという生徒が増えてきている。選択肢が増える中、こうしたことが今後さらに増えてくると思われる。進路指導をする上で、このことを中学校はきちんと押さえておく必要がある。
- ・ 多様な価値観や要望に対応することは公立高校の当然の役割だと思うが、最近、教育が消費財として扱われていることを危惧している。「〇〇高校に〇名合格させました」ということが、塾等の実績に利用されているようなところがある。他にも、従来は、推薦入学に出願している生徒は、公立高校を第一志望にしていると思っていたが、ここ数年、合格後に辞退する者がいる。発表後に辞退者が出ることで、結果として、合格できる可能性のあった子が涙をのむことになるし、中学校の進路指導への信頼もなくなる。

## ウ 今後の制度の在り方について

### (7) 制度設計に向けた議論の方向性

- ・ 意識調査にあたって、PTAの会員の方から質問があった。「今後どのようなものかわからないと、子どもに対してどう説明して良いのかわからない。」というような質問であった。この懇談会を今後どのように進めていくのかという、一定の目途を明確にすべき時期であると思う。
- ・ 本懇談会においては、新しい制度を作るということだけを前提で議論しているわけではないので、現行制度をきちんと踏まえた上で、どの部分を検証し、改めていくべきなのかという議論も必要である。
- ・ 今の社会において、グローバル化への対応や大学に行っても就職できていないなどといったことを踏まえると、なんとなく高校に進学して、さらに、大学進学後に中途半端な大学生活を送るということにならないよう、中学生のキャリア形成を考えていかなければならないのではないかと。そのためにも、目的を持った高校選びができるような制度設計をすべきだと強く思う。
- ・ 個人個人が自分の希望を実現するために、制度をどう活用するかということはあるが、あまりそれに引きずられて基本姿勢を崩してしまうと、制度が複雑になりかねないので、今あるものの基本理念は何なのか、その理念に関わってこの制度のこの部分を変えるべきだということ議論していくべきだと考える。  
基本姿勢としては、中学生が高校を選ぶ時に、自分の将来やキャリアにきちんと応えてもらえる教育を受けられる学校がどこか、ということをも本人がきちんと納得して選択できる制度を作っていくということが大切である。
- ・ すべての高校は、どのような形で入学してきたにせよ、一人一人の生徒が望む進路や将来の希望について、十二分な対応をお願いしたい。希望進路等が合っ

いる子は伸ばせるが、合っていない子は伸ばせない、ということは、公立高校ではあってはならないことだと思う。その子が望む将来に向けて、実現可能なサポートをしっかりと行うことを基本に考えてほしい。

- ・ 京都市・乙訓地域だけを見ても地域性は多様であるが、どこの都道府県でもそうであるように、入試制度は府内全体に関わるものであるため、そのことも十分考慮して検討しなければいけない。

#### (イ) 公立高校の役割・私立高校との関係

- ・ 公立高校としてセーフティネットの役割を果たすことは大切である。これからも担っていかねばならない。  
また、経済的に困難な家庭に対して、公立高校にもっと進学できるしくみや支援が必要である。(私立高校のあんしん修学支援制度の拡充等によって、)保護者の経済的な負担面も変化し、私立高校が担う部分もかなり増えてきたことは否めない。保護者や生徒の意識の変化にも大きく影響している。
- ・ 公立高校の役割は何かということを見つめ直した抜本的な入試制度の再構築が必要である。受検機会の複数化も含め、セーフティネットのしっかりした制度を考えていただきたい。
- ・ 中学生は、公立高校だけではなく、私立高校も含めた中で高校を選んでいるので、公立高校の入試制度を検討する際には、私立高校のことを抜きに考えることはできない。私立高校の制度も踏まえて検討すべきである。  
公立を希望している生徒は多いと思うが、現行制度に課題があるために私立高校に進学するということがあるとすれば、制度を改善していかなければならない。
- ・ 本懇談会のことは私立高校の先生からも注目されている。  
中学生にとっては、公立高校の入試があつて私立高校の入試がある訳ではない。2月上旬から3月上旬までの期間に、日程的には公立・私立を合わせて多くの高校を受検することができるが、生徒たちは試験と合格発表の繰り返しの中で、かなり疲れているのが現状である。生徒の負担軽減を図る意味でも、入試日程については、私立高校とも調整しながら考えていく必要がある。
- ・ 京都市内の私立高校への進学率はこれまで低かったが、平成23年3月卒業生については進学率が30%に達した。こうした状況を踏まえ、公立高校の入試制度に検討する際には、私立高校のことも頭においておく必要がある。
- ・ 最近、卒業式まで入試結果を待てない生徒が多くなってきている。併願の私立高校に合格した段階で気持ちが切れてしまい、公立高校の合格発表を待たずに、私立高校への進学を決めてしまう実態がある。複数校受検できるというメリットも大切だが、入試時期についても検討する必要があると考える。
- ・ 制度変更によって、もしも学校間で生徒数の偏りが生じたとしても、教員の指導力に偏りが生じないようにしてもらいたい。

#### (ウ) 制度のわかりやすさ

- ・ 様々な生徒に対応できるような入試制度や高校づくりをしてきた結果、複雑な制度になってきたという経過がある。わかりやすい選抜制度を作る必要があると

は思うが、多様化に対応しようとするれば制度も細かくせざるを得ないし、多元的な評価尺度を設けると、基準がわかりにくいといった矛盾が現行の制度に表れてきている。何をわかりやすくするのかを考えなければならない。

併せて、高校としては、生徒の多様化への対応として、高校入学後に生徒の様々なニーズに合わせた教育をしなければならないが、合わせすぎると今度は高校における仕組みが複雑になりすぎる。それぞれについて、どこで折り合いを付けるのかが非常に難しい。

- 完全な総合選抜や単独選抜は、制度としてはわかりやすいとは思いますが、かつて他府県で実施されていたような、成績順に入学校を決定していく方法や抽選によって入学校を決定していくという総合選抜方法などとは異なり、京都府では、可能な限り、自宅から近い高校や希望する高校に入学できるように、制度改善を重ねて現在の制度となっている。その工夫が限界に来ている中で、教育方針や学習内容などで学校を選択できるようにしつつ、どういったセーフティネットを設けることができるのかについて検討しなければならない。中学生のキャリア意識の醸成と進路指導との連携が鍵である。
- 制度というものは、わかりづらいから変えなくてはいけないものと、わかりづらくとも変えてはいけないものがある。子どもを中心に据えて、過度な競争を避けるなどの様々な問題を乗り越えるべく、受検機会の複数化や多元化を構築してきた。他府県では、学力検査への一本化といった動きがあると報道されていたが、セーフティネットなど公教育の役割として、残していくものや充実させていくべきものもある。  
そうした中で、総合選抜における複雑な選抜手順や特色選抜の特色がわかりづらくといった点については、変えていかなければならない。区分して検討することが大切である。

## (イ) 特色選抜

- 特色選抜について、保護者から合否の基準がわかりにくいと言われることがある。各高校が特色選抜において求める生徒像を定めているが、「〇〇部で頑張りたい」ということで特色選抜を選ぶ生徒がいても、その高校がその部活動については求めている、というように高校側のニーズと中学生のニーズがあっていない状況がある。生徒たちのニーズを生かすということであれば、さらに説明や情報提供など、高校と中学校間の緊密な連携が必要である。
- 特色選抜においては、何がその学校の特色なのかをもっとわかりやすく説明する必要がある。

## (オ) 通学区域

- 新聞報道では、大阪府で、3年連続で定員割れをした場合の措置や学区が廃止されるといったことが大きくクローズアップされているが、京都においても通学圏について議論していかなければならないのではないかと。  
保護者としては、子どもの通学距離や帰宅時間などを当然心配するわけだが、通学距離というのは、自宅から学校までの単なる距離や時間ではなく、交通アクセスなのだと思う。

## (カ) 京都市立中学校長会での議論

- 昨年3月から夏頃にかけて、京都市立中学校長会において「高校入学選抜あり方検討委員会」を設置して議論し、「まとめ」を作成した。  
内容は大きく2つあり、1つは、高校教育制度について。各公立高校がより魅力的な学校になってほしい。また、不登校傾向や障害のある生徒、日本語を母語としない生徒等の配慮を必要とする生徒についても、高校教育をしっかりと行ってもらいたい、ということである。  
2つめは、選抜制度について。生徒が目的意識を持って主体的に自己の進路を選択し決定できるしくみが必要であるという視点で検討をしてもらいたいということ。  
また、意欲ある生徒の進路を保障するしくみとして、セーフティネットを設け、生徒たちの進路保障を公立で受け入れてもらいたいということ。  
さらに、受検機会の複数化や多元的な評価尺度による選抜の必要性ということで、子どもたちにできるだけ受検機会を与えていただくことと、学力一辺倒でない評価尺度の選抜をお願いしたいということ。  
最後に、わかりやすい入学者選抜制度の構築。様々な要望に応えようとするほど、制度が複雑になっていくと思うので、その点については中学校も一緒になって考えていきたい。

## エ 次回の議論について

今回に引き続き、入学者選抜制度について協議する。

## (5) 次回の開催予定

平成24年4月中を目途に開催